回顧　学徒動員の記

永井清廣

はじめに

平成一七年（二〇〇五）は、昭和二〇年（一九四五）の太平洋戦争終結より六〇年（戦後還暦）、明治三八年の日露戦争終結より百年の、歴史上の大きな節目にあたる。この機に私の小学校時代の勤労奉仕や、中学時代の学徒動員の実体験を回顧し、記録に留めておくのも意義あることと思いペンを取ることとした。

昭和一二年七月七日の盧溝橋事件に始まる日中戦争、昭和一六年（一九四一）一二月八日のマレー半島・真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争と、大規模な戦争が継続する中で戦時体制も急速に強化された。国民総動員関連の法令が相次いで制定され、学徒動員にかかわる諸法令も年を追って整備され、学徒を否応無く戦争へと駆り立てて行った。その主なものを列挙しながら私の体験を綴ってみようと思います。

日中戦争・尋常小学校のころ

日中戦争の始まった翌年の昭和一三年には、国家総動員法が定められて戦時体制が整えられますが、学校に対しては文部省から次の通達がなされました。

文部省通達「集団的勤労作業運動実施に関する件」

この通達は、夏季休業中に学生・生徒に勤労作業を課すことができるとするもので、その対象は道路、史跡名勝の保護、農事手伝い、造林下刈り、開墾など、多岐にわたるものでした。

そのころ、私は別府市立石垣尋常高等小学校に学んでいましたが、四年生頃から苗代の害虫（めいちゅうの卵や蛾）駆除、どんぐり拾い、農園作業（馬糞拾いを含む）、ひま栽培、からむしの皮採取、堆肥づくり等々多くの勤労奉仕作業を経験しました。

勤労奉仕と小国民

太平洋戦争（当時は大東亜戦争と呼称）が始まる直前には次の法令が定められました。

昭和一六年　「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」

「国民勤労報国協力令」

前者は、三〇日以内の奉仕作業は授業として認めるとするもので、奉仕作業によって戦争による食糧難や兵士出征による労力不足を少しでも補い、同時に学生・生徒に軍国の少国

民としての自覚を促そうとするものでした。後者は、一四才～四〇才の男子と二五才～一四才までの未婚女子に勤労奉仕の義務を負わせるもので、各職場や各部署では報国隊が結成され、勤労奉仕に動員されるようになります。別府中学校でも勤労報国隊などが結成されました。

太平洋戦争勃発と学徒動員

太平洋戦争が始まり、戦局が厳しさを増してきますと、学徒動員に関する法令などが次々に定められるようになりました。次の「要綱」もその一つです。

昭和一八年　「学徒戦時動員体制確立要綱」

この「要綱」によって学徒動員体制は確立されたとされますが、決戦下の国防教育体制整備を目的とするもので、有事に即応できる学校の体制と勤労動員強化を実現しようとしたものでした。

別府中学校一、二年のころの勤労奉仕

このころ私は大分県立別府中学校で学んでいましたが、一、二年生の時（昭和一八～一九年）、学業のかたわら、或いは学業をぬきにして勤労奉仕に動員されました。思い出すままに奉仕現場を列挙して見ましょう。対象地域は別府市。

▽一年生時（昭和一八年）

竹の内など　「出征兵士の家」の稲、麦刈り・麦踏み

扇山の裏山　学校林の下刈り

浜　　脇　別府中学校仮校舎（旧殖産館）の夜警

六枚屏風　坑木の切り出し（学校防空壕用も含む）

明　　礬　坑木の切り出し（炭鉱用）

▽二年生時（昭和一九年）

扇山裾野　原野開墾（農園作り）

別府駅前　家屋疎開＝空襲時の類焼を防ぐために家屋・旅館などを取り壊し、間引く

鶴　　見　現別府鶴見丘高校敷地作り、ビワの木などの伐採、土掘り運搬

＊「別府中学校仮校舎」・「鶴見丘高校敷地作り」云々は、昭和一七年に現ビーコンプラザの地にあった別府中学校校舎が全焼したことが背景にあります。敷地作りは三年次も続きます。

学徒通年動員への歩み

昭和一九年ころになると、戦争は日を追って敗勢が濃厚となり、学徒動員も授業を放棄し、家庭を離れて、軍需工場で働く通年動員へと変わって行きました。次の法令がそのために定められました。

昭和一九年 三月　「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」

この「要綱」は、中等学校以上の学徒を原則として今後一年、常時勤労その他非常勤務に動員できることを定め、学徒動員通年実施を決定づけたとされるものでした。この法令によったのでしょう、私たちは二年生の時、次のような軍施設設営に動員されました。

「学徒勤労令」と別府中学校学徒の出動

▽二年生時（続き）

大分市高城　掩体壕（戦闘機などを格納する）作り、土掘り、もっこかつぎ

大分川岸　橋の取り付け、土台作り、土掘り、もっこかつぎ

大分市大洲　海軍航空隊飛行場滑走路作り

これに次いで八月には次の勅令が発せられましたが、これは、「引き続き学徒に勤労をなさしめる期間を一年とする」と定め、通年動員を念押しするもののようでした。

昭和一九年八月　「学徒勤労令」（勅令）

私たちの通年動員は昭和二〇年、三年になってからですが、上級生はこの「勤労令」により、昭和一九年八月からそれぞれ次のように軍需工場に動員されました。

▽五年生

昭和一九年八月一日動員

大分市中島製粉機工場（現王子西町）

大分市安部鉄工所　（〃王子南町）

▽四年生

同　年　九月一四日動員

同右工場

▽三年生

同　年　一〇月二四日動員

大分市第十二海軍航空廠（高城）

いずれの学年も、事前に父母会を開き、学校側より学徒動員の趣旨説明があり、前日または当日に朝見神社に詣でて安全祈願し、動員壮行式を執り行い任地へ出発しました。現地での、月月火水木金金、土・日曜なしの動員生活のスタートでした。

回想・軍需工場学徒動員

私の動員中の生活を振り返ってみると、幾分かの差異があるかとも思いますが、おおよそ次のようなものでした。

▽自宅から通勤の時期

午前五時起床五時三十分自宅（石垣）出発→徒歩で亀川駅（約四㌔・五〇分）へ→亀川駅発六時三十五分→別府駅発→六時四十五分→西大分駅着七時十五分→徒歩（同級生で隊列を組み、軍歌などを歌いながら約一㌔・二十分）→七時四十分中島製粉機工場到着→八時工場作業開始→昼食三十分→午後五時作業終了→往路を逆コースにて午後七時三十分帰宅。

工場は飛行機（一式陸軍攻撃機？）部品製造であったが段車ベルト方式でした。私は幸いにも工場に四台ほどあった直結旋盤の一台を担当し、エンジン部品らしい部品を製作しましたが、ネジ切りに難渋し、両山になって泣いたことも度々でした。昼の楽しみは「麦飯日の丸弁当」定食でした。作業途中に警戒警報→空襲警報発令で防空壕に避難したことも度々でした。

ある教師の教え

ある日の昼休み、引率の曾谷先生（数学担当）が、我々を集めて「君たちはこうして工場で働いているが工員とは違う学徒だ。昼間働いても夜は勉強しなければ駄目だ。将来陸士（陸軍士官学校）、海兵（海軍兵学校）・高校（旧制高校）など志願する志のある者は僕の家に来給え」と話された。私は遠方のため訪問できませんでしたが、夜先生の家へ行って勉強した友人にノートを借りて、数日遅れで勉強させてもらったことを思い出します。

空襲激化で工場も疎開

昭和二〇年七月になると、空襲の激化で中島製粉機工場が安全場所を求めて疎開移転することになりました。我々三年生組には動員先転換の命令が下り、坂の市第二陸軍造兵廠に行くことになり、同時に大在浜寮に合宿し造兵廠に通う生活が始まりました。そこには既に杵築中学と竹田中学の動員学徒が入居、勤務についていました。

私たちの造兵廠での生活は、身体検査や坂の市の現場の見学からスタートしましたが、また孟宗竹の二つの食器に大豆飯と味噌汁をいただき、腹をすかしながら雑魚寝をする生活の始まりでもありました。

終戦時の思い出

そうしているうち、八月一四日の夜、「明日ラジオで重大ニュースがある」との報で「きっとソ連に対する宣戦布告だろう」と囁きあって翌日を迎えました。

八月一五日正午、浜寮門衛舎のラジオでポツダム宣言受諾の玉音放送を聴きました。雑音が入りよく聞き取れなかった

のですが、「――堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ」の所だけははっきりと分かり、引率教師の話で戦争終結を知り、また翌日の造兵廠大広場での集会でそれを再確認しました。

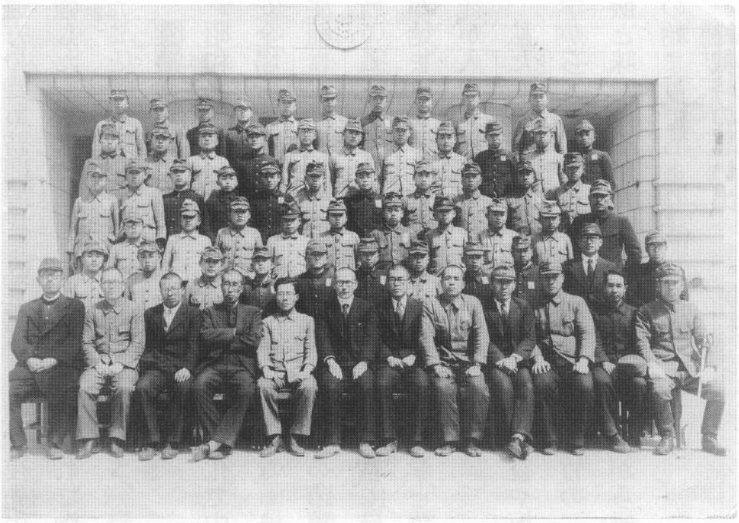
翌一六日、配属将校（予備学生）が我々を浜の松林に連れて行って話をしてくれた中で、「――広島、長崎の新型爆弾は、実は原子爆弾だ。君たちは科学で原子分子を学習しているから、それが物凄いエネルギーを持っていることは分かるだろう。」と語った一節は忘れられません。さらに忘れられない中の一つに、その日の食事で「ジャガイモの砂糖煮」をいただき「日本にも砂糖があったんか」と大声を出し合ったことがある。

学校生活復帰

終戦後三日くらいして「別府に駐留軍が来るので生徒を早く帰さねば」という先生方の配慮で関係者と掛け合いの結果、私たちの動員は約一年ぶりに解除され、帰宅することが出来ました。帰宅してみると母と姉は田舎に疎開し、父と祖母が迎えてくれました。近所に若い女性が皆無だったことを今もよく覚えています。

九月の声を聞き、終戦直後の混乱もやや収まったころ、私は学徒動員で通学出来なかった懐かしの学園に復学、戦後の新たな学校生活へと第一歩を踏み出しました。

「回顧・学徒動員の記」このあたりで「完」としますが、終わりにあたり、教育途上にある生徒をして、再び戦争に強制動員することのないことを願い、強く世界平和を希求しながらペンをおくこととします。



昭和19年３月
別府中学校２年３組
学徒動員の下命を前にしての修了記念写真
最前列の先生方　左より６番目　校長　安田鎌造
５　〃　主任　弘中　肇（英語）
４　〃　曽谷　卓（数学）
右端　配属将校　朝久野正範中尉